

苗場山麓 ジオパーク

Vol.

40

振興協議会だより

【発行日】令和元年12月24日
【発行】苗場山麓ジオパーク推進室
【お問い合わせ】025-765-1600



ガイド研修会にてラフティングを体験しました

10月6日、今年度のガイド研修の一環として、ラフティングを実施しました。その趣旨は、「ラフティングを通して、川遊びの醍醐味を知るとともに、千曲川－信濃川の兩岸の地質的な素材（地層、断層、鍵層等）を水平な目線で見てみよう。」です。今回は初年度として、津南町上郷逆巻から小下里までのおよそ5kmを約90分かけて探検しました。苗場山麓の千曲川－信濃川沿いの川岸は、護岸工事等が比較的少なく地質や地形が自然の状態のまま残され、溪谷のようになっています。ここでは、川岸をつくる傾く地層や十数本の滝、断層を観察することができ、川下り以外の醍醐味を味わうことができます。

今回ラフティングを実施したきっかけは、認定ガイドにラフティングの専門家（日本アウトドアサービスの岩館広彬氏）の参入があったことです。ボートや装具、安全指導等の全面的なサポートをしていただきました。

水平目線で、しかも間近で川岸の地形や地質を観察し調査するには、ラフティングはとても優れたものです。記録を集積し、ガイドがラフティングツアーに同行する仕組みなどを考えていきたいと思います。

次年度以降、百合居橋から小滝を含めた千曲川下り、津南町岨滝から宮中付近までの信濃川下り、更に、中津川と清津川沿いの川下りを検討していく予定です。



中津川左岸トレッキングコース整備の現状と展望



苗場山は30万年前に噴火し、大量の溶岩を流し、沖ノ原台地でその流れを止めました。その厚い溶岩層を断ち割り、V字谷を形成したのが中津川です。その中津川左岸端部に1.5m幅の散策道を開削中です。出発点は、石坂集落の上にある観音堂脇です。観音堂⇒百合窪⇒龍辰峰⇒穴藤の峰までのルートは完成しています。苗場山の山体が美しく見える前倉トド近傍に展望台（山の展望台）が設置され、そこから鳥甲牧場入口までの県境コースが今年度開削できました。ブナの純林を歩く素敵なコースです。

今後、開削を検討している穴藤の峰⇒高野山集落跡⇒結束のあずき坂峠⇒前倉のトドまでのコースは、難所が多く、また妙法牧場との協議が必要です。さらに妙法牧場⇒矢櫃村跡⇒大秋山村跡⇒屋敷⇒和山対岸⇒切明のコースを来年度から着手する予定です。これら一連のコースが整備されれば、見玉⇒見倉⇒中の平⇒大赤沢⇒甘酒村跡⇒小赤沢⇒和山⇒切明（一部整備が必要）の「牧之の道」との連結が可能となります。また、切明から野反湖までの山道との連結により、群馬県境トレイルと結線されます。群馬県境トレイルは、既にみなかみでスノーカントリートレイルと連結しています。さらに信越トレイルの延伸計画が進められており、結束のあずき坂峠で繋がる予定です。

これら一連のトレッキングコースの連結は、首都圏と最短距離に出現する日本最大級のトレッキング網です。切明近傍の佐武流山境界は、第2の白神山地として評価される豊かな自然が残されており、そこを玄関口として魅力的な焼額高原⇒奥志賀高原へ散策道整備も想定されます。そのためには広域的に地域資源を俯瞰する視点と現実化する建設的な連携が必要です。





第10回日本ジオパーク全国大会おおいた大会に参加しました

毎年開催される日本ジオパークネットワーク（以下JGNと略す）の全国大会が、大分県で開催されました。10月31日～5日の期間で開催され、苗場山麓ジオパーク（以下GPと略す）からは、石澤清人栄村教育長をはじめガイド2名、事務局3名の計6名が参加しました。大分県には、おおいた姫島GPとおおいた豊後大野GPがあります。開会式は、大分市内で開催されました。本大会では、10回目を迎える節目の大会となり、全国の44の認定されている地域と認定を目指している地域から1500人以上が集まりました。同時に、JGNの運営会議、事務局長会議、首長会議なども開催されました。これまで10年間の歩みが紹介され、記念誌も刊行され、苗場山麓GPからはガイドでもある桑原悠会長の原稿が掲載されました。おおいた豊後大野GP会場では、オーラルセッション、ポスターセッション、ブロック別によるワークショップの出展、分科会が開催されました。分科会では、保全、ユニバーサルデザイン、SDGsをテーマに開催され、1人ずつ参加しました。

ワークショップでは、中部ブロックでブースを作り、苗場山麓GPは、糸魚川GPと共に「ヒスイ探し」、「縄文手ぬぐい」、「縄文着試着体験」を通して、100人ほどのお客様に縄文文化を紹介しました。そして、中部ブロックとして各GPが岩石を持ち寄り、岩絵の具塗り絵ワークショップを開催し、苗場山麓GPでは、火焰型土器のイラストで実施しました。ジオパーク関係者、大分県民、観光客など喜んで頂き、苗場山麓GPをPRしました。



全国大会は、九州・中四国近畿・中部・関東・東北・北海道というブロック毎に巡って開催されています。来年の全国大会は、島根半島・宍道湖中海GPで開催されます。更に2021年は、中部ブロックで開催されます。まだどのGPで開催されるかは未定です。1000人を超える規模での大会ですので、苗場山麓GPで開催することは難しいですが、苗場山麓GPも協力して盛り上げることやツアーの開催が想定されます。



佐渡ジオパークにて中部ブロック大会が開催されました

日本のジオパークは地域ごとに6つのブロックに分かれ、運営や研修会を行っています。苗場山麓ジオパークはフォッサマグナに係る地域を中心とした、「中部ブロック」に所属しています。今回、11月23日、24日の日程で、佐渡ジオパークを会場に中部ブロック大会が開催されました。

23日は参加した8つのジオパークから「ジオパークを用いた宣伝・商売の実例紹介」の事例発表が行われました。その後、ジオガイドと事務局、2つのグループに分かれ、ガイド向けの研修会と事務局会議が行われました。24日はガイド向け研修会の内容を受け、佐渡ジオパークのガイドが考案した新しいコースを巡り、コースやガイド内容に対し率直に意見を出し合うといった内容でした。

事例発表では様々な取り組みや宣伝方法を学ぶことができましたが、他のジオパークと比べて苗場山麓には「全国規模の観光地・有名処」がない事も改めて実感できました。全国に向けた情報発信のあり方を丁寧に模索する必要があると考えます。また、佐渡のガイドが考案した新コース巡りは様々な地域の実際にガイドをやっている立場の方々から活発に意見が出る取り組みであったため、苗場山麓でも積極的にこのような機会を作っていくべきだと感じました。



津南小学校前に解説看板を設置しました



津南小学校前の国道を渡ったところにある駐車場に解説看板を設置しました。

この場所は、信濃川と対岸の東頸城丘陵や外丸集落が一望できます。そして、信濃川が曲がっている様子を見ることができ、川の働きや硬い地層によって川が曲がる様子、東頸城丘陵の隆起や地すべりの様子、信濃川の比高を体感できます。季節ごとに色々な姿を見せてくれることから写真スポットになっています。冬季は雪のため看板は撤去されます。

ぜひ、訪れて頂き、景色を楽しんでください。

認定ジオガイド
が伝える

ここが好きだよジオパーク

認定ジオガイドがおすすめの場所、
もの、ことなどを紹介していきます。

涌井泰二さん



なぞなぞなぞ

???のジオパーク（ガイド No.11 涌井泰二）

<??? その1>

「どうして縄文人たちは、こんな大雪が降るところから逃げ出さなかったのですか？」ジオガイドをしたとき、お客さんからいただいた質問です。皆さんなら、どう答えますか？縄文人は、我々現代人の想像を遙かに超えて、遠い土地と交易していたようです。例えば、糸魚川のヒスイは、遠く青森県の三内丸山遺跡でも見つかっています。そんな縄文人は、なぜこの豪雪の地にあえて住み続けていたのでしょうか？

車社会となった今、ともするとこの地域は、「豪雪地＝不便で住みにくいところ」といったマイナスのイメージになりがちです。しかし、この地域には、大昔から雪がもたらす自然からの豊かな恵みを、最大限に生かしてきた生活の知恵（雪国文化）があります。

とかく現代社会で忘れてしまいがちな生活の知恵をたどりながら、?に迫っていくのもジオパークの魅力です。

<??? その2>



あずき坂のてっぺんにある碑

左の写真は、結束集落のあずき坂のてっぺんにある碑（いしぶみ）です。お地藏様と男女一对の双体道祖神と言われる碑が、そこだけ時の流れが止まったかのように、今でも静かに佇んでいます。いつ誰がどんな思いや願いを込めて、この碑を置いたのでしょうか？

ジオガイドをしていると、よくこうした古い碑に出会います。この地域の各地に残るいかつい顔をした青面金剛像は、古くからある庚申講の本尊だと言います。反里口集落の旧草津街道沿いには、今もひっそりと道供養塔が残っています。また、船山新田には、石橋供養塔もあります。昔の人々は、どうして道や石橋までも供養したのでしょうか？

碑との対話は、私たちを時間旅行に誘ってくれます。

<??? その3>

苗場山麓は、多雪の日本海側と雪のあまり降らない太平洋側とを分ける境になっています。それに伴い、日本海側と太平洋側の動植物の分布が南限や北限となり、実に多様な動植物が見られます。例えば、カワトンボという春に小川などで見かけるトンボがいます。現在、ニホンカワトンボとアサヒナカワトンボの2種類に分けられていますが、見かけはほとんど同じです。その分布を調べてみると、栄村や秋山郷から津南町にかけての中津川流域には、アサヒナカワトンボが分布し、一方、津南町の信濃川流域にはニホンカワトンボが多く分布していることが分かってきました。まさにその分布の境界線がこの苗場山麓にあるのです。それはなぜでしょう？

ジオパークを歩くと、?が広がり、新たな?が深まるばかりです。皆さん、ジオパークに?を探しに行きませんか。



早春の縄文ムラ（なじょもん）



苗場山麓に分布の境界線があるカワトンボの仲間



河川実験装置を使った授業が実施されました

10月23日、十日町市立貝野小学校5・6年生の河川実験装置を用いた授業を実施しました。この実験装置は、模型で実際に水を流し、川の流れをつくるもので、二度と同じ川の流れはできません。毎回1回限りの流れになり、微妙に変化します。水量と海面の高さも変更でき、水も循環するため、なかなかの優れものです。

以下に、授業で学んだ子どもたちの感想を一部紹介します。

「たくさんの土や砂が海に流れつく。流れた砂は新しい土地（三角州）になる。川（の途中）は河岸段丘になる。」「川は、流れる力が強いところは、外側のカーブの所だと思った。けずったところで土砂くずれができています。自然の力はとてもふしぎ。」「川の水の働きは、弱いところにどんどん水が流れていく。何もしなくても自然の力で行って、びっくりした。」

授業や講座などで、専門員の解説つきで利用可能です。
お問い合わせはジオパーク推進室 TEL025-765-1600まで



突撃しよう!となりのジオ便り～伊豆半島ユネスコ世界ジオパークからこんにちは～

みなさんこんにちは、伊豆半島ユネスコ世界ジオパークです。私たちは昨年4月にユネスコが認証する世界ジオパークの仲間入りをしました。世界に向けて情報発信をし、また海外からのお客様を迎え入れています。世界のジオパークを見回した時、どういうジオサイトのお客様に訴求しているのでしょうか。どういう見どころに関心が寄せられるのでしょうか。日本国内だけを見渡していたのではなかなか分かりません。各国あちこちのジオパークを訪問してみると、日本で暮らしていると気がつきにくいジオサイトの魅力があるようです。その1つが温泉です。ジオパークで温泉が湧くところではほぼ漏れなく目玉のジオサイトになっていて、源泉が自然湧出したり(写真①)、噴湯(写真②)になっていたり、生きている大地の姿を象徴する現象として紹介されています。ましてその湯に浸かるというのは訪問する際の大きな魅力になっているようです。

伊豆半島も国内有数の温泉地です。家康ゆかりの熱海、国内トップ級の源泉湧出量を誇る伊東、文豪たちが逗留した修善寺や天城湯ヶ島など、各所で湯が湧き出していますが、その湯は単純泉や塩化物－ナトリウム泉です。色もほとんどすべてが無色透明。硫化水素臭が漂う温泉、白濁したミルクの様な湯、古くからの湯治場街の風景、こうした温泉地らしい景観や個性的な湯とは縁がありません。伊豆は火山の大地です。現在(完新世)こそ各地で噴火が続出というわけではありませんが、更新世(約1万年前)まで半島各所で火山が噴火していました。その時の余熱が地下にはまだ残っていて、温泉の熱源となっているのです。伊豆半島各地に温泉が普遍的に分布しているようにも見えますが、実は地下三百メートルの地温が百度近い場所が偏在しており、この上に湯井、なかんずく温泉地が立地しています。ですから雨水が地下へ浸透するゾーン、涵養された地下水がこの熱で暖められ相対的な密度低下によって地上に湧き出すゾーンに分けられます。一見伊豆のそこかしこで湧いている温泉のようですが、メカニズムを考えるとそうではないのです。凡庸な温泉ばかりのようですが、地下に浸透した海水が煮詰められ、塩分の濃度が傑出して高い温泉(高張泉)も点在しています(写真③)。そんな温泉を巡って大地のなり立ちに思い馳せてみて下さい。



写真① ギリシア、レスボス島ユネスコ世界ジオパークのポリクニトス温泉の源泉井と湯室の建屋



写真② インドネシア、チレトゥーパラブハンラトゥ ユネスコ世界ジオパークのシンロック噴湯。河床の各所から100度の湯が噴き上がる。



写真③ 南伊豆町下賀茂温泉の湯けむり。湯1ℓあたり30g超の塩化物を含む濃度の高い湯が自然湧出している。